

氏名・(本籍地)	沼倉雄人(神奈川県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第90号
学位授与の日付	平成25年3月15日
学位論文題目	良忠『観経疏伝通記』の研究
論文審査委員	主査 林田康順 副査 金子寛哉 副査 小此木輝之

## 沼倉雄人氏 学位請求論文審査報告書

### 「良忠『観経疏伝通記』の研究」

#### 論文の内容の要旨

本論は「良忠『観経疏伝通記』の研究」と題し、浄土宗第三祖然阿良忠上人(以下、敬称略)の著作である『観経疏伝通記』(以下、『伝通記』)について、四章にわたって『伝通記』の基礎的整理を施し、その上で、良忠の教義的特徴である諸行往生説について、良忠が何を意識して『伝通記』において諸行往生説を認め得たのかを考察している。

本論では、まず第一章「『伝通記』の成立過程」において、『伝通記』の成立過程について整理を行っている。第一節「良忠の著作活動」では、先学諸説の整理に基づき、また金沢文庫所蔵の良忠講義録を含めて成立時期の確認を行っている。良忠の『観経疏』に関する注釈書である『観経疏聞書』『観経疏略鈔』『伝通記』の三書のうち、『観経疏聞書』は後の『観経疏略鈔』『伝通記』の草稿的な位置にあることは既に指摘されているが、それが『伝通記』の草稿本とされる『福岡鈔』と同一のものであるという点については一考を要することを指摘している。また『伝通記』と『観経疏略鈔』について、『観経疏略鈔』が『伝通記』からの抜き書きであるとする先学の整理について、『観

『観経疏略鈔』のみにみられる説示は『伝通記』を参照しつつ、新たに執筆したものか、もしくはもともと『伝通記』の成立過程にある『二十五帖鈔』にみられた説示である可能性を指摘している。次に第二節「法然門流における『観経疏』注釈書」では『伝通記』の成立背景の一端として、法然門流における『観経疏』諸注釈書の成立状況と法然門流の諸師がどのような地域に展開していたのかを整理している。良忠が後半生において主に活動した京都、鎌倉にはそれぞれ西山義、諸行本願義に連なる諸師が教線を張っていたことは確かであり、これらの諸師の『観経疏』注釈書から少なからず影響を受ける可能性があることを再確認している。第三節「『伝通記』の成立過程について」では、第一節、二節において整理した点を踏まえて、『伝通記』の成立について、その伝承史料と近代以降の研究成果を参照して整理を行っている。『伝通記』の成立を伝える史料においてその記述は一樣ではなく、また先学の研究においても『福岡鈔』『二十五帖鈔』を別個の著作として扱ったり、一つの著作として扱ったりするなど、その区別が混在していることを指摘した上で、『伝通記』の未再治本・再治本・極再治本の区別について再整理を行い、『伝通記』は内容的に一五巻の体裁が整った建治元年（一二七五）を一応の成立とみることができると提示している。

第二章の「『伝通記』の書誌的整理」では、『伝通記』の書誌的整理の一環として、再治本から極再治本に至る段階でどのような校訂がなされたものか検討を行い、また従来の研究において行われていなかった『伝通記』の写本、版本についての現状を整理している。第一節「『伝通記』未再治本と再治本について」では、建治元年（一二七五）に成立した『伝通記』再治本について、聖問『糎鈔』にみられる再治本と極再治本の相違に関する記述を抽出し、再治本の復元を試み、また、『糎鈔』における再治本と極再治本の相違箇所を指摘について、その正否の判断のため、『良栄見聞』の牒文と比較を行っている。従来、再治本と極再治本の相違について、『散善義記』就行立信釈中の「而不論也」と「凡信有三重」の間に、「今云三義中初義階文謂上文信三福定散又云専心念佛及修餘善今云就行立信前後符合但看此文意」という四二字が再治本にはあったことのみが注目されていたが、『糎鈔』における再治本、極再治本の相違箇所に関する記述の整理、検討によって新たに三箇所を

指摘している。第二節「『伝通記』の写本および版本」では、『伝通記』の写本、版本の整理を行い、二本の写本と七種の版本があることを確認している。また『浄全』『正蔵』所載の『伝通記』の底本である文政五年版は、知恩院貞現の発起であり、それ以前に刊行された版本との校合のうえに版行されたものであることを明らかにし、さらに音徴「伝通記考例」から、校訂作業の内容について、誤字や文の倒置を改正しているものの、具体的に校訂作業が施された箇所は明確ではない。その作業の是非についても定めがたい状況であり、現時点では、『浄全』『正蔵』所収本を用いざるを得ない。これらのことは『伝通記』のみならず良忠の著作全般にわたって諸本の整理作業が必要であることを指摘している。

第三章「『伝通記』における引用文献とその特色」では、『伝通記』の研究における基礎作業として引用文献の整理、検討を行い、良忠の教学背景の一端をうかがわせ、第一節「『伝通記』所引の諸経論疏」では、『伝通記』に引用される典籍の全体的な整理を行い、他の法然門下の『観経疏』諸注釈書における引用典籍との比較を行っている。『伝通記』における典籍ごとの引用数を集計し、二〇〇以上の典籍を二〇〇〇箇所以上にわたって引用していることを確認し、もっとも多く引用されていた典籍が当時法然門下の時代に至って流布しはじめた宋代浄土教典籍のひとつである元照『観経新疏』であることを指摘している。次に他の法然門下、とくに証空・幸西・隆寛・長西の『観経疏』諸注釈書の引用典籍についても整理を行い、引用典籍の傾向や引用数などを通じて、『伝通記』が法然門下諸師の諸注釈書とは異なる特異な引用傾向を持つことを明らかにしている。その中、『伝通記』の広範な引用典籍は『光明抄』と比較的通じるものがあることを指摘し、その一方で、『光明抄』の序題門と釈名門をとりあげて比較を試みた結果、序題門でいえば、『光明抄』の引用が六三箇所であったのに対し、『伝通記』は一六六箇所を数え、『光明抄』と『伝通記』の引用の一致箇所は一三箇所となり、引用典籍からみた『光明抄』の影響は割合としては決して大きいとはいえないことを指摘している。第二節「『伝通記』と宋代浄土教典籍」では、前節の整理を踏まえ、良忠が元照『観経新疏』をもっとも多く用いる理由について考察を行っている。『伝通記』における元照『観経新疏』の引用傾向は基本的に語句解釈が大半を占

めるが、その中で批判的にとりあげる箇所が数箇所みられる。それらのことは、いずれも善導の教学に沿わない点であると分析し、良忠は、当時、新規に流入した宋代浄土教典籍、とくに元照『観経新疏』の説示を多用することで、元照の『観経』解釈の是非について検討し、元照の解釈に対する一評価を試みたに過ぎず、法然門流の諸師において新渡資料に偏りすぎている解釈を暗に批判したものであると指摘している。

第四章「諸行往生に関する諸問題」では、良忠の教義的特色とされる諸行往生説について、従来、『東宗要』を用いて本願理解と実践行を中心に論じられていたのに対し、行者の機根、往生する仏土を考慮し、良忠の『観経疏』解釈から諸行往生説について言及している。第一節「機根観」では、従来論じられていない良忠の機根観について整理を行い、良忠は「聖道門・浄土門」という教判に用いられる語を「聖道（門）の機・浄土（門）の機」という機根の分別に用い、聖道の機を声聞・縁覚・菩薩の三乗とし、浄土の機を三乗以外のいわゆる常没の衆生として、仏道修行上に絶対的な機根の格差をみていたこと、また浄土の機のなかにおいても、「定機・散機」という『観経』所説の実践行に基づいた機根の分類を行い、凡夫の中においても行に対する堪・不堪という能力的な差を認めていることを明らかにしている。第二節「仏土観」では、従来、『東宗要』の論題を中心として、門下の異議との関連から、辺地胎生や懈慢国往生の問題が取り沙汰されていたが、善導『観経疏』玄義分、二乗種不生会通に展開する仏土論に対しては、阿弥陀仏の化土について対応する内容が多く見受けられることから、『伝通記』における仏土関連の問答を整理し、その背景に南都唯識法相系の仏土論への対応姿勢がうかがえること、また阿弥陀仏の報土を他力他撰の報土とすることによって、その仏土は『成唯識論』に説かれる報土（受用土）とは異なり、阿弥陀仏が衆生を撰取するための仏土であることを主張していることを明らかにしている。第三節「本願と実践行」では、諸行往生について中心的な問題となる本願と実践行について、『観経疏』解釈に重点を置き、『伝通記』における本願、実践行に関する説示の整理を行い、諸行非本願の立場でどのように諸行往生を認めているか検討を行っている。良忠は阿弥陀仏の四十八願を生因の行が誓われた第十八願（生因の願）とそれ以外の衆生の撰取するための願（撰機の願）

とに類別し、称名念仏以外の実践行によっても廻向を用いるなど、一定の条件下において摂機の願に乗ずることで凡夫が報土に往生できることを『観経疏』解釈から示していることを明らかにしているものの、実質的には凡夫が称名念仏以外の行を成就させることができるかということ、良忠はほぼ不可能であるととらえていたことを指摘している。

最後に、①『伝通記』における宋代浄土教典籍の影響について、②良忠の諸行往生説の特徴について、③良忠が諸行往生説を提示した背景について、の三点について、本論を踏まえた上で、再度考察を巡らせて結論としている。

### 審査結果の要旨

【総評】本論は「良忠『観経疏伝通記』の研究」と題し、浄土宗第三祖然阿良忠上人（以下、敬称略）の著作である『観経疏伝通記』（以下、『伝通記』）について、四章にわたって『伝通記』についての基礎的整理を施し、その上で、良忠の教義的特徴である諸行往生説について、良忠が何を意識して『伝通記』において諸行往生説を認め得たのかについて考察したものである。

良忠の著作は「報夢鈔五十余帖」と呼ばれるほど多く、大部な著作も相当数ある。その中、善導『観経疏』の注釈書である『伝通記』は良忠が半生をかけて推敲し続けた主著である。浄土宗祖法然は善導『観経疏』を指南として選択本願念仏説を示し、法然滅後には主な門弟が続々と『観経疏』の注釈書を著している。しかし、それらの『観経疏』解釈は法然の教学から離れ、各門弟独自の教義が示されているものと言い得よう。『伝通記』はこのような状況に反駁、さらには対抗し、法然—聖光と相承された、いわゆる鎮西義の教学に則った著作であり、鎮西義における善導『観経疏』解釈の指標というべきものである。ところが、従来の研究における良忠の思想的な立場は、主として『浄土宗要集』や『選択伝弘決疑鈔』を中心として論じられる傾向が強く、『伝通記』はその文脈の中で辞書的に参照されてきたに過ぎない。なるほど『伝通記』は一五巻という大部であることや『観経疏』の注釈書という形態であることから、良忠の思想的な特色を引き出すのは容易なことではない。その一方、法然没後に新たに流入してきた宋代浄土教文献や唯識などの通仏教的な文献を含む豊富な引用からは、他の法然門下への対応という

粹にとどまらない立場、すなわち良忠の教学背景となる南都仏教で培われてきたであろう学問姿勢を見ることができる。諸行往生説についても、結論的な内容が論述された『東宗要』を研究するだけでは知り得ない、より原初的な思想構造を『伝通記』にみることができる。このような重要な文献であるにもかかわらず、『伝通記』はその全体像がほとんど解明されておらず、そもそも基礎的な研究が充分に行われたと言い難い状況にある。そうした中、本論文は、『伝通記』を正面から取り上げ、数度の校訂を有する成立過程の変遷、現在、実施し得る限りの写本および版本の整理、膨大かつ複雑な引用経論の整理など、『伝通記』の基礎的研究を粘り強く、かつ、緻密に行った労作であり、これらの整理を踏まえ、良忠における教義上の問題としての諸行往生説について果敢に取り組んだ力作である。

【講評と今後の課題】口述試問、並びに、委員による審査会においては、①いわゆる宋版典籍の当時における流伝状況、良忠による入手経路についての一層の究明の必要性、②第三章における緻密な引用文献の整理が、第四章の思想的研究に充分活かされているとは言い難いこと、③自力自摂・他力他摂の報土を始めとする良忠独自の仏土理解と法相等の捉える化土を始めとする仏土理解との関係性の究明が不十分、④上機・中機と共に語られる中容の機を始めとする衆生の機根の位置付けと仏の冥加・摂凡の願・生因の願等という阿弥陀仏による救済構造の整理が不十分、などのいくつかの改善点が指摘された。

さらに、東宗要をはじめとする良忠の他文献との比較や法然門下の他派や他宗等の交流、対応、反駁を通じた、良忠自身の思想変遷をはじめとする総合的思想研究を望む声があがったが、この点については、本論の総結にも言及されていることでもあり、筆者自身の意識に留められていることは言うまでもない。良忠の膨大な著作に対峙することは、たいへんな作業ではあるが、早急にならず、筆者自身のライフワークとして着実に進めていただくことを大いに望むところである。そうした地道な作業こそが、筆者自身が語っている「良忠の思想を当時の仏教界のなかに位置づけること」であり、「良忠の浄土教理解の独自性を明らかにしていくこと」であり、「新たな良忠像」の提示となるであろう。いずれにしても、本論文において、良忠の大著にして

畢生の書である『伝通記』を取り上げ、良忠の思想背景と教学体系を捉え、その全体的思想構造を明らかにした取り組みは、今後の良忠研究、あるいは、良忠以後の浄土教研究の礎となり、新たな地平を切り拓く貴重な成果であり、課程博士論文として相応しいことを述べて審査報告とさせていただきます。